
僕、生きて帰ったら翠屋を継ぐんだ……

綺雨

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕、生きて帰つたら翠屋を継ぐんだ……

【Zコード】

N7479Y

【作者名】

綺雨

【あらすじ】

高町家の次男として生を受けた主人公。妙な前世の記憶を持ちつつも平穀に生きる彼の前に妙なモノが現れる。未来から来たといふ『彼女』だが、この世界は『彼女』の知る世界とはかなり違うようだ……

基本ほのぼの、たまにシリアスっぽい、あつと「メディアなお話。

プロローグ（前書き）

初投稿。更新は不定期です。

プロローグ

やはり私のマスターはあの人だけ、か。

最愛のマスターとの別れから数十年。宙空に浮かびながら『彼女』は独りごちた。

幾つもの研究所を転々とし、幾人もの人間が『彼女』を使おうとした。

けれど。

機能ばかりが増えていき、進化し続けた『彼女』の前に、しかし担い手は一向に現れなかつた。

その性能の高さゆえに眠りにつくことすら許されず、ただ待ち続けるしかなかつた『彼女』。

だけどそれももう終わり。

感情すら持つた『彼女』は歓喜に打ち震えていた。
あの役立たず共も今回ばかりは褒めてやってもいいかもしない。
時間遡行。

本来それは不可能だとされてきた。

しかし先日その概念が覆されたのだ。

といつてもたどり着く先は並行世界であり、完全な時間遡行が不可能なことには変わりない。

おまけに開けられる『穴』はせいぜいが拳大ほど。時間旅行など夢のまた夢。

だが『彼女』にはそれで十分。

ブゥウン！！

システムをハッキングし、実験装置を起動させる。

軽い次元震と共に開き始める『穴』。

研究員たちが気づいて慌てだすが、もう遅い。

『私はマスターに会いにいきます。御機嫌よつ、間抜けさんたち

上機嫌な声を最後に『彼女』は姿を消した。

『彼女』の名はレイジングハート。かつてのエースオブエースの愛機。

それは史上初のデバイスの次元犯罪者（？）誕生の瞬間だった。

「はい、じゃあここまでにしてしましょう」
その言葉に合わせたかのように鐘が鳴る。

四時限目終了の合図。

昼休みだ。

途端、学校全体がざわめきだす。
いい加減慣れてもよさそうなのに。
どうにも懐かしく感じるその気配に、知らず顔を緩ませた。

私立聖祥大附属小学校。それがこの学校の名前。
地元では有名なお金持ち学校である。

ちなみにウチはただの喫茶店。お父さんたち超頑張った。
通い始めて二年以上経つが、本当に小学校か？ と言いたくなる
設備にはいまだに驚かされる。

不満があるとしたら給食がないことと、制服のデザイン。
水兵服そのものなのだ。いつそ帽子も付けてくれないか、つてくれる。

女子の制服は凝ってるくせに。

愚痴を言つても仕方がないし、結構な学費が掛かってるからやめる気もないけど。

それに。

「礼也！ 行くわよ！」

ここには親友もいる。

振り向いた先には僕の今生初めての友達の一人。

長く伸ばした髪は金糸のように煌き、白人系の色素の薄い肌は滑らかでまるで白磁。幼いながらも愛らしく整った顔には、エメラルドを嵌め込んだが如き瞳が勝氣な光を放っている。

我ながら身贋廻の入りまくった描写だと思うが、それを抜きにし

ても類稀な美少女だ。

アリサ・バニングス。

アメリカ人の実業家を父に持つ、正真正銘のお嬢さま。

中流以上の家庭の子女が揃うこの学校でもぶつけあつのお金持ちなのだ。

どれくらいかつて、いつと専属の執事が付くレベル。最初知った時は驚きを通り越して呆れてしまった。

そんな感じで育ちにはどんなにもなく違いがあるものの、なんだかんだで一年付き合いが続いている。

「今日も屋上？」

檸檬色の弁当包みを取り出し聞いてみる。答えは分かつてゐるけど。

「もちろん。よく晴れてるし、席とられないようになつてからわよ」

「はいはい」
この子と弁当を食べるよくなつてから、屋上でしか食べたことがない。雨の日は除く。

「相変わらずアンタの弁当って豪華よねえ」

女の子らしい小さ目の弁当箱に敷き詰められたご飯をぱくつきながらアリサが呆れたような声を出す。

屋上にいくつも設置してあるベンチ。その一つに仲良く座つて食事中。

「あはは。なんかいつも張り合ひやがってね。今日なんか早く田代が覚めたから特に」
僕の手元には二つ弁当箱がある。一段の上下とかではない。単純に一人前。

理由は結構しょーもない。

「黒い方がアンタのだけ？ 桃子さんは分かるけど、なんでアンタがそんなに料理できるのよ……」

「練習すれば誰でもできるって」

できるかー！ とか叫んでるアリサは置いていて。

お母さんと僕。実は一人で別々に作っているのだ。ちなみに黒い弁当箱が僕作。赤い弁当箱がお母さん作である。

お母さん、高町桃子はウチで経営している喫茶店『翠屋』のパティシエさん。お母さんのお菓子を求めて遠方からもお客様さんが来るほどで、特にショーケースは絶品だ。

お菓子作りが本業のお母さんだけど、店で出す軽食まで作るだけあって料理の腕前も一流。

そんなお母さんが作ってくれるというのだから任せたければいいのだけれど。

店の準備もあるお母さんはすこく忙しいのだ。だから料理は得意な僕が自分で作ることにしたのである。

しかしそれで納得しないのがお母さん。

礼也のお弁当はお母さんが作るの！ とか言い出して。

それから何をどう間違ったのか、どっちが美味しいできるか勝負だ！ って謎の超展開になつた。

そのせいで今では味はもちろん、栄養バランスに飾り付けまで凝りに凝ったトンテモ弁当ができるようだ。ただし一つ。カロリー計算してるの意味ないよね。まあ結構運動するからいいんだけど。

「今日ははずかがないから、ちょっとキツイかなあ

「あ、そつか。そういえばはずかが休むのって初めて？」

「だね。あの娘、あれで意外と頑丈だし」

僕のもう一人の友達。月村すずか。

いつもは彼女とアリサに分けながら完食するのだが、今日は風邪でお休みらしい。

五时限目の体育はハードになりそうだ。

ちなみにアリサとすずかと僕で、いつも一緒に仲良しトリオ（他称）の完成である。

……というか僕の場合この二人しか友達いない-ish。悲しくなんてないんだからね！？

『翠屋』で偶に給仕してるから通りすがりの人によく声かけても

らえるしー。

お姉ちゃんの友達とはよく遊ぶし！

……あれは遊ばれてるのか。

顔はかわいいもんねえ。お母さんをそのまま子供にしたみたいな顔だし。

お母さんは美人だ。柔らかい茶色の髪は綺麗だし、十代といつても通じかねない若々しく優しげな美貌。日本人らしからぬ青い瞳だつて大好きだ。

自慢のお母さんではあるけど、自分がその美人さんとそつくりとなると微妙な気分になる。髪を短くしたら似合わなすぎて、家族全員から禁止されたし。そりや丸刈りのお母さんとか見たくないよね。それ以来僕の髪は首にかかる程度になっている。

お兄ちゃんくらいとまでは言わないけど、もうちょっと男前に生まれたかった。

それはともかく。

「今日の放課後は空いてる？ 暇なら一緒に見舞いに行こうよ」
友達が少ないとその分大事にできるよねっ！ 決して負け惜しみなんかじゃない。

「もちろん行くに決まってるでしょ。私だって心配なんだから」
さすが。やっぱアリサは優しい娘。持つべきものは友、だね。

「よし。移動手段ゲット」

「待てコラ。私の目を見てもう一度言つてみなさい」

「アリサは今日も綺麗だね！」

……恥ずかしいからって無言で殴ることないと思つんだ。

月村邸。

バーニングス家の使用人である鮫島さんに送つてもらつて、かなり早い時間に着いた。

どこのホテルかと言いたくなるこの洋館がすずかの家なのだ。

月村家はここ海鳴市のみならず、日本全体でも有数の名家だつたりする。

「あ、ノエルさん。お久しぶりです」

鮫島さんから連絡がいつていたらしく、メイド長のノエルさんが出迎えてくれた。

フルネームはノエル・E・Hーアリヒカイト、だつたか。見た目二十台前半のいかにもできそうなクールビューティー。

前に聞いたが、アリサの憧れの女性の一人らしい。

クールなアリサ……ないな。

お嬢さまとしていろいろと教養は身に付けているし、そう振舞うことはどうできるだろうが、基本的に彼女は感情家なのである。良くも悪くも。

まあ、今はすずかだ。

「すずかは大丈夫ですか？」

「はい。午後には良くなられて、今は…………読書をなさつております」

なんだその妙な間は。元気ならいいけど。

「そうですか。良かつたね、アリサ」

長い廊下を歩きながら、さつきから全然しゃべらないアリサに振つてみる。

なんかやけに大人しい。

ノエルさんが出てきたあたりから、それはもう借りてきた猫のように。

僕の後ろに隠れてなんかそわそわしてゐる。

「あれか？　いきなり好きな人が前に出てきて何言えばいいか分からないつ、とか？」アリサぐらいの歳だったなら憧れと好きつて区別付きづらいだらうし、ありえるよね！

ちょっとと思いついてノエルさんにそつと耳打つする。首を傾げながらも頷いてくれた。

「アリサ様」

「ひやい！」

ビクウツ！！と飛び退るアリサ。なんかすゞしい反応。

「アリサ様は、今日も大変可愛らしげですね」

「！――！――！？」

あれ、なんか怖がってる？　ちょっと涙目だし。あ、あれか。幸せすぎて怖い、ってやつ。

合つてるかどうかはともかく涙田のアリサが可愛いすぎる。ノエルさんは困つてゐるけど、もう少しこのままにしておこう。忍び足ですすかの部屋を手指す。何度も来たので道はバッチリだ。後ろで礼也さま！？とか悲鳴が聞こえるけど気にしない。馬に蹴られたくないしね！

「すずかー、いる？」

無数に並ぶ扉の一つをノックする。

バタバタ！　ゴソゴソ……ドシンッ！　ドタバタ……

待つこと数十秒。

「れ、礼也君こんにちはっ！」

「……そこまであからさまに隠されるとすゞしい気になるなあ」

顔真っ赤だし。息荒いし。

「な、何のことかなっ！？」

この娘なかつたことにする気だ……

仕方ない。僕も鬼じゃないし、またの機会にしてあげよう。忘れてはあげない。

とりあえずアリサにもしたし人物描写でもするか。

「紫色の綺麗な長い髪をした優しい女の子。目はアメジストみたいで大きくて可愛らしい。今は白い肌が紅潮しててちょっと色っぽい。白いカチューシャがトレードマーク。活発なアリサとは逆にお淑やかなお嬢さまで、今から大学の専攻まで考えてるす”い娘です」

「い、いきなり何言つてるの…？」

カ〜〜〜ッ！ つとせりに顔を赤らめるすずか。なんか爆発しそう。

「いや～今日ね、学校でお友達の紹介をしてみましちゃう… つていうのがあったんだ。だからすずかでもやってみた」
「いきなりやらいでよお、つてまだ顔真っ赤。でも氣は逸れたみたい。

「で、何隠したの？」

「それは…………つ！ い、言わないよつー？」

む、残念。いけるかと思つたんだけど。

「もうつ。……それより一人でお見舞いに来てくれたんだよね？」
アリサちゃんは？

「ああ、アリサならノエルさんと百合空間を展開

「しておりませんので悪しからず」

「…！」

どつかれでてきたノエルさん。すずかが卒倒しそうになつてゐるじゃないか。

「つて、アリサはどうしたんです？」

「アリサ様ならもうすぐいらっしゃいますよ

つまり置いてきた、と。いつも完璧なメイドのノエルさんにしては珍しい。

すずかもそう思つたのかまた驚き顔になつてゐる。

「それはともかく、礼也様。先程はよくも逃げてくださいましたね？」

要するにこのメイド様は僕に仕返しに来たわけだ。

くつ、僕は親友の恋路を応援しただけだというのに！ そりやノ

エルさんがそっちの気がないのは知ってるけどさつ！

つと、そんなこと言つてる場合じやない。

「すずか！ お大事にね！ 僕はもう帰るから！」

「畏まりました。ではご案内いたします」

「速つ！？ つて痛い痛い痛い！ 握力何キロあるの！？」

ノエルのキャラが違う、とか呴いてるすずかに恭しく一礼し、踵を返すノエルさん。

前にちょっと昔話したら急に遠慮がなくなつたんだよね、この人。それ自体はうれしいけど、とりあえず右手で拘束した僕の両手を離してくれないだろうか？ 骨が砕けそうなんだけど。

「つて、待つた！ そっち玄関じやないって！ そっちにあるのはアナタの部屋ー！」
ばたん。

今日はお父さんが監督をしている翠屋JFCの試合の日。応援に来てただけだったけど、欠員があつたらしく急遽参加することになった。

「試合終了ー！ ジュ、12-0で翠屋JFCの勝利！」
…………どんまい。

「アンタ、相変わらず大人気ないわね」

喫茶『翠屋』のテラス席にて。
ジャージなんか持ってきてなかつたから、普段着のままいつも三人でお茶。

「いや、僕まだ子供じゃないか」

「そういう問題じやないわよ」

六得点四アシストという華々しい活躍を見せた僕は、なぜかアリサに呆れられていた。

むー、頑張ったのに。

「だつて、アリサとすづかが見てるんだから全力でやらないと」と
これが、私の理由！

「そう言つてくれるのは嬉しいけどね。限度つてもんがあるでしょ」

「そうだよお。相手チームの人たち、泣いてたよ？」
くつ、すずかまで。

「人は涙の数だけ強くなれるんだ」

「はいはい

絶品のはずのフルーツケーキはなんだかしょっぱかった。

「今日はありがとなー！」
「おかげで助かったよー！」

打ち上げが終わり、サッカー少年たちがぞろぞろと帰りだす。看板娘（？）として見送る僕にかけられる暖かい言葉の数々。

思わず胸がジーンとなつた。

やっぱ僕頑張ったよね！？

アリサたちとは大違ひだ。さすがスポーツマン。

一人ウンウンと頷いていると。

「そうだ。お礼にコレやるよ。ただの石だとは思ひナビ、キレイだろ？」

確かに今日のキーパー君だつたはず。男の子に青い菱形の宝石みたいな石をもらつた。

うん、確かに綺麗だね。

でもなんかいやな予感がするんだけど。

とりあえずお礼を言つて観察してみる。

ますます強くなるいやな予感。

「僕のこれ、あんまり外れないんだよなあ」

……よし、埋めるか。

「動かないで」

家に帰り、貰つた石を庭に埋めようとしてたらいきなり女の子にナイフを突き付けられた。

……え？

意味が分からん。つていうかどつから現れたこの娘。ウチの流派の神速どこのじやないぞ。あれも速いけど僕なら辛うじて知覚できるレベル。この娘は瞬間移動してきたようにしか見えん。

「それをどうするつもり？」

それ、ってどれだ。

この石か？

ジロスチャーで尋ねると「クンと頷く。

改めてみるとこの娘可愛いな。

年齢は同じくらいで中性的な顔立ち。アリサより色が薄い金髪を

後ろで結んでて、目の色はすずかに似てる。

無地の黒いTシャツにジーパンっていう飾り気のない服装だけど、雰囲気に華があつて全然野暮つたく見えない。赤い宝玉が付いたネックレスがワンポイント、なんだろうか？

つてそうじやなかつた・

「どうするつて……埋める?」

「……埋めるの?」

「うん」

「……なんで?」

「……なんとなく?」

「……そう、なんだ」

なんだこの会話。

この娘、この石が欲しいのか？

それなら刃物で脅したりしないで、素直に言つて欲しいんだけど。

「これ、欲しいの？ だつたら

『マスター！ やつと会えました!』

あげるよ、と続けようとした言葉は第三者の声に遮られた。

『いやあ、性別が違つたので判断に時間がかかりましたが、間違いないです！ この泥棒猫もたまには役に立ちますね』

「ちょ、酷つ！？ って違う！ 何しゃべってるのさ！？』

『うるさいです。この方こそが私のマスターですよ？ 跪きなさい』

い

「なんで！？」

これは、この娘の胸元でピカピカ光つてるネックレスから声が出てるんだろうか？

新型携帯端末？ でもこの娘も驚いてるし……

「えーと、それは？」

わたわたしてる金髪つ娘に聞いてみる。

「あ、えつと、その、『これは……』

『初めまして、マスター！ 私は貴方の、貴方だけのデバイスで

す！名前はレイジングハート。レイハとお呼びくださいー』

これが僕と、僕の生涯の相棒との出会いだった。

「ロストロギアは、この付近にあるんだね」
夜。

喧騒も遠いビルの屋上に、一人の少女が佇んでいた。
街の明かりに照らされるその装いは異様と言える。
右手に斧らしきものを持ち、長いツインテールと共に靡いている
のはマント。そして腰に布を巻いているとはいえ、レオタードのよ
うな黒衣。

変態とか言っちゃいけない。

「形態は青い宝石。一般呼称はジュエルシード」

眩く少女の瞳はどこまでも澄んでいて。

それでいてどこか寂しげだった。

「気を付けて、フェイト。ニアドランクの魔導師がすでに動いて
るんだ」

少女の足元に寄り添う大きな橙色の狼が心配そうに言葉を発する。
フェイトと呼ばれた少女は微笑み、その頭をそつと撫でた。
喋る狼とコスプレ少女。二人（？）の間には確かな絆が感じられ
た。

「うん。聞正在の。スクライアの天才児、ユーノ・スクライア。
正面からぶつかることは避けないと」

でも、譲れない。

澄んだ瞳の少女は静かに闘志を燃やす。

「母さんのために」

夜の街に狼の遠吠えが響き渡った。

香りのいい紅茶を口に含み、笑みを浮かべる。

頻繁にやるすずかの家でのお茶会だが、今日はちょっと特別なのだ。

アリサには一人友達がいる。一人はこの家の娘、月村すずか。もう一人は高町礼也。自称普通の子。

二人だけ？ とか言われそうだけど全然寂しくはない。一人は親友だと思ってるし、一人もきっとそう思つてくれる。たぶん。だといいなあ……

それはともかく。

自他共に認める仲良しグループなのだけど、いくら仲が良くてもどうしても秘密というものはできてしまうものだ。中でも礼也はいっぱい秘密を隠してる。すずかも同じ考えだったから間違いないはず。

仕方がないとは思うものの、親友を自任するアリサとしてはあまり面白くはないわけで。

今日はその礼也が、自分から秘密を打ち明けてくれると言つてきたのだ。

軽い調子ながらも真剣な目で告げた礼也に、すずかと一人で思わずガツッポーズしてしまった。

すずかもアリサも、女の子みたいな顔してるくせに全然弱いところを見せてくれない彼のことを結構心配してる。こつちはたくさん相談に乗つてもらつてるもんだから余計に気になるし。

だからようやく自分たちを頼つてくれたような気がして嬉しかった。

さあ、何でも言つてきなさい！ いじめられてる、とかショタコン疑惑のあるノエルさんになんかされてる、とか実は女の子です、とか何だつていいわよ！ いくらでも助けてあげるし、受け入れてあげるから！

「実はね」

ティーカップをソーサーに戻し、一呼吸おく礼也。関係ないけど

「イツつて無駄に作法がしつかりしてるわよね。最初にお茶に招いた時なんて先生より綺麗で、こっちが焦ったくらいだ。

「僕

」

「ゴクリ。自分の唾を飲む音がやけにうるさい。わくわく。

手に汗を握る。鱗を見ればすずかも緊張するのが分かる。

どきどき。

「魔法使いになつたんだ」「

思わず殴つた私は絶対に悪くなこと思つ。

僕は今、正座している。下は芝生だからそんなに辛くないけど、頬と後頭部が痛い。特に後頭部。

「もう、何考えるのさ君は！」

原因は田の前で仁王立ちして金髪つ娘二人。

アリサと、この間恐喝してきた娘。コーン・スクライアちゃん。

「魔法は秘密にするように、って。言つたよね？」

この娘、僕がアリサたちにしゃべった途端後ろに転移してきたんだ。そのまま後頭部に痛恨の一撃。

何で殴つたし。絶対拳の痛みじゃない。そもそもなんで聞いているのさ。

「この付近にジュエルシードの反応があつたからサーチしてたんだよ」

律儀に答えてくれるのはいいけど、僕の足をグリグリ踏むのはやめようか。アリサとすすかが引いてる。

「君が誤魔化そうとするからだよ」

言いがかりも甚だしい。真っ当な疑問をぶつけただけじゃないか。そして何で殴つたかは今分かつた。僕の頬ペシペシ叩いてるナイフの柄でしょ。殺す気ですか。

「で？ なんでしゃべったのかな？」

ジューエルシード放つておいていいのかと聞きたいけど、そうしたらないナイフの刃がこっち向く気がする。

「……まじめに答えるとね、こいつ秘密つて複数人で共有した方がやりやすいと思うんだ。もちろん信頼できる相手じゃなきゃ駄目だけど。その点一人なら家族並みに信頼してる。それが一つ目の理由」

ペシペシペシ……

とりあえず合格、か？ これがザクッ！ になつたらゲームオーバー。なにこれこわい。

「ふ、一いつ目はね、こっちのが理由としては大きいんだけど……ジユエルシードみたいな危険物が街中に散らばってるならさ、せめて友達には巻き込まれて欲しくないと思わない？」

内緒にしてたら危険性すら教えられないのだ。それで彼女たちが酷い目にあつたら悔やみきれない。

ペシペシ……ピタ。

「はあ。理由は分かつたよ。でもあんまり褒められたことじやないんだからね？」

言い足りなさそうだけどナイフを仕舞つてくれるコーノちゃん。これで納得してくれるのだからきっと優しい娘なんだう。アリサ以上にバイオレンスだけど。

そして気持ちを切り替えたのか、先口僕にした説明を一人に繰り返す。

次元世界の概念。時空管理局の存在。ジユエルシードのような口ストロギアの危険性。魔法のあれこれ。そして今海鳴に潜んでいる危機について。

「その、ゴメン。私たちのために言つてくれたのに、殴つたりして……」

説明が終わると、やけにしおらしくアリサが謝つてきた。

素直なのはいいけど、ちょっと落ち込みすぎかな？ らしくない。「全然気にしてないよ。友情と信頼の証を右ストレートで突き返されたことなんて、全然」

「思いつきり気にしてるじゃないのー！」

「あはは、冗談だよ。涙目になっちゃって。可愛いなあ、もううがーー！ つてなつたアリサをすずかが宥める。うん。いつも通りだ。

……あ。

ホツとしたら大事なこと思い出した。

「ねえ、ユーノちゃん」

勝手に人のお茶を飲んでるのはまあ許すとして。

「なに？ あとボクのことはユーノでいいからね」

「あ、うん。僕のことも礼也でいいよ。それでさ

「？」

「ジユエルシード。探さなくていいの？」

「……………あ」

目を見開いたユーノの背後で、青い光が立ち昇った。

真っ先に我に帰つたのは、やはり経験豊富なコーカーだつた。

「封時結界！」

コーコーの足元に翠色の魔方陣が現れ、結界（多分）が周囲に広がつていく。

生き物の気配が一切なくなり、残つたのはコーコーと僕。それからアリサとすずかのみ。

「……あれ？ 魔力持ち以外は弾かれるんじゃなかつたっけ？」

「あんな至近距離で展開して下手に干渉されたほうが厄介だからボクが入れたの！ 一人は礼也が守つてよね！」

そう言いつつもこつちに防御結界っぽいのを張つてくれるコーコー。かつこよすぎる。

全員が見つめる先で青い光がようやく落ち着き。にやーお。

「…………すずか、すゞいね。あんな大きな猫も飼つてるんだ」

「違うよーー？」

うん、知つてる。

響き渡る鳴き声。

メキメキとへし折れる木々。

森の上から覗く、愛らしい、仔猫の顔。

「…………たぶん、仔猫の大きくなりたいって願望がジュエルシードに正しく叶えられたんだろうね」

解説するコーコーも呆然としてる。

確かにそんだけ大きけりや他の猫に餌盗られることもないよね。

月村家のエンゲル係数は跳ね上がるだらうけど。

どしんつ、どしんつ。にやーお。

猫の足音なんて初めて聞いたよ。グレイプールの材料の一つが今ここに！ ……どうでもいいな。

「とりあえず、攻撃性はなさそうだからさつと封印落ち着いたユーノがその手に魔力を集めた瞬間。

ズドオオオン！！

金色の魔弾が猫にぶち当たった。

「アルフ、足止めを！」

「ああ！」

弾の飛んできた方向に目を遣ると、黒衣の少女に橙色のでっかい犬がこちらへ飛んできていた。

金色の長いツインテールが目立つ少女は猫の方へ。そして犬の方はユーノに突っ込んでくる。

「なめないで」

それをあっさり避け、後ろ足を引っ掴んだユーノ。

そのまま振り回し、

「ちょ！？」

「飛んでけつ」

少女の方へブン投げた。……魔法なしでも強いんだね。しかしそれだけでは終わらないユーノちゃん。

「アルフ！？」

大型犬より大きいその体を受け止めて体勢を崩した少女。そこへ、

「Laser Cannon！」

翠の奔流が進った。

「……避けられちゃつたかあ。やっぱ砲撃は苦手だなあ」魔力の残照が消える。

その先にはマントを大きく削がれながらも健在の少女たちが。犬は氣を失つてるっぽいけど。

「くつ、やつぱり桁が違う。母さん！」

少女の叫びに応じたのか。

その眼前に現れる巨大な魔方陣。

初めてユーノに動搖が見られた。

「次元転送！？」 こんな大規模……」

が、その表情はすぐに呆れ顔に変わる。

魔方陣から出現したのは五十以上の機械兵。並みの魔導師なら絶

望的な状況であろう。少女にも安堵が見える。

けれど。

Photon Buñuel

それは並みの魔導師ならの話。

二〇の前は無数の力強が並ぶ

Fire

踩躡

それにその言葉がふさわしい。

その爆音が終わると、機械兵は跡形もなく消え去っていた。

機械兵は

二二一

代わりに、先程打ち出されたはずの光弾がズラリ。

「そんな、フォトンバレットは直射型じゃ……」

「あ、ごめん。それ、ボクが創った誘導弾なんだ。元になつた魔

法がフォトンバレットだつたつてだけで。フォトンバレット改、つ

「感じかな」

光弾がパツと散り、少女の周囲を完全に囲む。

なんかノリノリで解説していくけど、そのツインテ少女たぶん聞こ

えてないぞ。泣いてるし。関係ないアリサとすずかまで涙目だよ。

L

がつん。

.....え？

『全く。魔力反応を捉えて起きてみればマスターはいないし、フレットもどきはマスターの見せ場を搔つ攫おうとしてるし
ばた。とユーノが倒れる。同時に、少女を囲んでいた光弾は消失。
凍った空気の中、ユーノの頭があつた辺りに浮かぶ赤い宝玉がチ
カチカ点滅する。

『マスター、聞いてますか？ 置いていくなんて酷いですよ。
慌てて転移してきたんですから』

それは紛れもなく、先日押しかけ相棒（？）となつたデバイスで。
「な、な、なにやつてんのレイハあああー！？」
僕は間違いなく今生最大の悲鳴をあげた。

陽光が気持ちよかつたのか、いつの間にか寝てる仔猫（大）。
気絶してる犬とコーカ。

涙目でぽかんとしてる幼女三人。
ビュンビュンと目の前を飛び回つている赤い何か。
……どうしてくれるんだこの空氣。

とりあえず赤いのは無視して一番重症っぽい謎の女の子の方へ。
腰が抜けたのか、空も飛ばずにへたり込んでるし。

「えと、大丈夫？」

「いや……！」

思いつきり怯えられた。うさぎみたいに赤い目がすごいウルウル
してる。人形めいた可愛らしい顔も相俟つて、罪悪感が半端ない。
こっちも泣きそうだよ。

『マスター、早くその娘やっちゃいましょう！ 今ならただのサ
ンドバックです！』

「あの怖いお姉ちゃんは寝ちゃったから。ね？ もう大丈夫だよ」
近づいたら泣かれそうなので、少し離れたところに腰を下ろして
再チャレンジ。

ついでに物騒なこと言つてるのは握りつぶす。

手の中から恍惚とした声が出てるけど聞こえない。聞こえないつ
たら聞こえない。

「……いじめない？」

「うん。いじめたりなんかしないよ。ほら、あのお姉ちゃんたち
のと、行こ？ あのお姉ちゃんたちは優しいから」

「…………うん」

よかつた。なんか幼稚園児をあやしてる気分。どうも微妙に幼児
退行してるっぽい。

それはいいんだけど、頷いてはくれたものの動かない。

もじもじ。もじもじ。

「？ どうかした？」

「その……あしが、うごかないの」

ああ。本気で腰が抜けてるのか。気持ちは分かる。ユーノちゃん、すごい嗤つてたもんねえ。あの娘絶対ドジだよ。優しいとか思つてた数分前の僕を殴つてやりたい。

警戒はだいぶ解けてるみたいなので、近くに寄つて背中をわすりあげる。

吐いてる人とかによくする行為だけど、子供にやると結構安心させる効果もあつたりするのだ。たぶんだけど。

「おぶつていくから、しつかり掴まつて」

ちよつと落ち着いたところで女の子のまえにしゃがみこむ。

「……ん

なんかすっごく素直。

しつかりとしがみついてくれたところで、そつと立ち上がる。

「軽いな、おい。ご飯食べてるのか？」

気になつたけど今は後回し。

椅子のところまでゆつくり運んで座らせる。

「アリサ、すずか。この子のことお願い。やっぱこいてあげて」
僕も付いてあげたいけど、あんまりノンビリもしていられない。
だつて結界消えるんだもん。あんなデカイ猫が見つかったら大騒ぎだ。

あれで意外と面倒見のいいアリサと、よく氣の回るすずかなら大丈夫だろうし。

くいっ。

猫の方へ行こうとしたら服の裾を引っ張られた。

「どうしたの？」

「わるわる。

「どうか、いくの？」

「何この子かわいい。」

「あのねこさんをこっちに連れてくるんだよ。あんなところで寝たら風邪引いやうからね。そうだ！ 連れてきたらねこさん抱っこしてみる？』

「……うん！」

ヤバイ。なんか目覚めそう。

ぱあっ、と笑顔になつた女の子に戦慄しつつも猫の真下に。

『レイハ、できる？』

握り締めたままだつた手を開いて確認する。

『ああっ、マスターの温もりが全身に……』ほん。もちろんです、

『マスター』

『……じゃあ、お願ひね』

とつさに放り投げたくなつたけど今は我慢。汚物を摘まむようにして猫にくつづける。

『……なんかすごいあっけないね』

魔力光すら漏らさず、あつという間に仔猫は小さくなつた。そのそばに青い宝石、ジュエルシードが浮いている。

『封印、つと。状態がひびく安定していましたからね。暴走状態だとこつはいきませんから、舐めちゃいけませんよ？』

ジュエルシードを吸い込みながら忠告するレイハ。

基本的にぶつとんでる子だけど、だいたいは僕のことを持つてくれるからいまいち怒る氣にもなれないんだよねえ。それが僕のためになるかはともかく。

『わあ、ねこさんだあ！』

まあ、今はレイハのことばい。

とりあえずこの子が可愛すぎる。

眠つたままの仔猫を抱いて戻つた僕を迎える笑顔。この笑顔のためなら死ねる。かもしない。

『その子、フェイトっていうんだって』

仔猫を抱きしめてはしゃいでる女の子を見ると、アリサが隣に来て教えてくれた。

ちゃんと仲良くしていってくれたらしー。

すずかの方はそのフェイトちゃんと一緒に仔猫を撫でている。

その様子を見るに、もうすっかり打ち解けているようだ。

よきかなよきかな、つと。

一人してにやにやしていると。

『ああ、フェイトがあんなに笑顔で……ありがとうございます』

『うんうん。私からも姉としてお礼を言つわ』

なんか出た。

「……今度は何？」

いい加減疲れてきたんだけど。格好からして面倒臭そうそудし。片方は黒のタイツにボディースーツをくつ付けたような服。正直下着にしか見えん。一応白いジャケットを羽織つてるけど、サイズがぴつちりの上に一つしかボタン留めてないからほとんど隠せてない。ナースキャップじみた帽子がまた異様さを際立たせる。

薄茶色の髪をした優しそうな美人さんなんだけど、それだけになんかすごい残念。似合つてはいるんだけどさ。でもこいつちはまだマシなんだ。

問題はもう片方。

フェイトをそのまま幼くしたような幼女。

君はなんで素つ裸なんだよ！？

『へつ？ 私たちが見えるのですか？』

見えちゃなんかまづいのか。いや、幼女の方は確かに見られちゃまづいか。

いまさら恥ずかしくなったのか手で隠してるけど、もう遅いって。その様子に苦笑しながら美人さんは少し考えるよつた仕草を見せ、『うーん、まづいというかですね……私たち、幽霊なんですよ』につっこり笑つて言つてくれた。

……はい？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7479y/>

僕、生きて帰ったら翠屋を継ぐんだ.....

2011年11月23日18時54分発行